ヒヴァ・ハン国史研究とフィールドでの史料調査

Field Survey and Research on the History of the Khanate of Khiva

塩谷　哲史
SHIOYA Akifumi

Ⅰ．はじめに

筆者が最も長く研究しているテーマは、ヒヴァ・ハン国史である。ヒヴァ・ハン国は、中央アジアの二大河川の一つアム川の下流域に位置するホラズム・オアシスに16世紀以降成立した政権の総称である。1512年ウズベク遊牧集団の南下によって成立し、17–18世紀転換期のアラブ・シャー朝の断絶、1804年のコングラト朝の成立、1873年のロシア帝国による保護国化を経て、1920年まで存続した。領域で言えば、現在のウズベキスタン共和国西部、トルクメニスタン共和国北部にまたがる地域に広がっていた。大学の学部時代には、ヒヴァ・ハン国史の中でもコングラト朝（1804-1920年）初期の政権史を卒業論文のテーマに選んだ。しかしその内容が博士論文の内容にまで発展するうえで、鍵となった史料との出会いがあった。今回はその史料との出会い前後を中心に、筆者が経験した紆余曲折について述べていきたい。

Ⅱ．ヒヴァ・ハン国史の史料

ヒヴァ・ハン国史、とりわけその政権史の研究のための主要史料は、大別すると三種類あった。第一にハン国の首都ヒヴァにあった宮廷で書かれた年代記である。ウテミシュ・ハージーの『チンギズ・ナーマ』（ウテミシュ・ハージー 2008）、アブルガーズィー・ハン（在位1644-1663/64年）の『テュルク系譜』『トルクメン系譜』（ʿAbū al-Ghāzī Bahādur Khān 1958；ʿAbū al-Ghāzī Bahādur Khān 1970）を除くと、ハン国で継続的な修史編纂事業が行われるようになったのは、コングラト朝期に入ってからであった。シール・ムハンマド・ミーラーブ・ムーニス（生没1778-1829年）とその甥ムハンマド・リザー・ミーラーブ・アーガヒー（生没1809-1874年）が合わせて６編の年代記を編んだ。これらの年代記には天地創造から1872年までのホラズムの歴史が描かれている。さらにムハンマド・ユースフ・ベク・バヤーニー（生没1858-1923年）は、1913年までの記述を含む年代記を編んだ。これらはすべて、コングラト朝のハンたちの命令によって、チャガタイ・トルコ語で編纂され、彼らに献呈された。

第二は古文書である。現在、日本側では堀川徹、磯貝健一、矢島洋一が中心となり、ウズベキスタン共和国の研究者と共同で民間所蔵文書の研究を進めている（中央アジア古文書研究プロ

ジェクト）。また19世紀以降ヒヴァ・ハン国の宮廷で作成された公文書も、まとまった形で残されている。その最大のコレクションが、ウズベキスタン中央国立文書館に所蔵されているヒヴァ・ハン文書である。本コレクションについては、ブレーゲル（Yuri Bregel）の紹介に詳しい（Bregel' 1966）[1]。それによると、このコレクションは、1873年ロシア軍のヒヴァ遠征時に、従軍した東洋学者クーン（Aleksandr L. Kun）が宮廷から接収した文書を中心に構成されている。それらはサンクト・ペテルブルグにある現在のロシア国民図書館とロシア科学アカデミー東洋写本研究所に所蔵されていたが、1962年末、ウズベキスタン中央国立文書館に移送され、現在に至っている。総点数は正確な目録を欠くために明らかではないが、4000点あまりと考えられる。文書の種類としては、勅令、報告書・請願書、土地売買文書を中心とした証書、書簡などの文書と、土地台帳、租税台帳である。そしてその半数以上にあたる2100点以上が、報告書・請願書や書簡で占められている。内容からは、二つのグループに大別できる。第一は、ハン国の役人や支配下の諸部族の長老たちからハンないし宮廷高官に宛てられた報告書・請願書や書簡、および役人や長老たちの間での往復書簡、第二にハン国臣民からハンないし宮廷高官に宛てられた、租税や賦役の免除、土地の分与、紛争解決、俸給支払いなどに関わる請願書、および私人たちの間で交わされた約400点ほどの書簡である。また時期からすると、大部分がサイイド・ムハンマド（在位1856-1864年）、サイイド・ムハンマド・ラヒーム（在位1864-1910年）両ハンの治世に作成されたものである。

第三は旅行記・使節記である。イランのガージャール朝、オスマン帝国、ロシア、イギリス、他のヨーロッパ諸国など様々な国・地域からの旅行者や使節団のメンバーが残した諸記録がある（Rižā Qulī Khān Hidāyat 1876；Mehmed Emin Efendi 1879[2]；Murav'ev 1822；Danilevskii 1851；Abbott 1884；Vámbéry 1864など）。これらの記録は、ほとんどの場合が数日から数か月単位でのヒヴァ滞在経験をもとに記述されているため、都市については詳細だが、農村部についての記述は少ない、直接見聞きした事件の記述と伝聞にもとづく記述が混在しているなど、利用に注意を要することが多い。しかし、ともに旅をした現地の人々の人となり、通過した街道周辺の地形、植生、動物、天然資源に関する情報は豊富であり、何より現地で書かれた史料には必ずしも書かれない日常の事象について考察する手掛かりとなる記述が含まれていることも多い。またとくに使節の記録からは、宮廷内でハンや高官たちに謁見し、交渉を行った際の、宮廷内の様子についても貴重な情報が得られる。

＊本稿は、科学研究費補助金（基盤研究Ｂ、研究課題「近現代中央アジアにおける水利と社会変動―定住民と遊牧民の相互関係を中心に―」研究課題番号19H01316）の研究成果の一部である。

1　ブレーゲルは、1974年ソ連からイスラエルへ亡命し、その後渡米して、インディアナ大学のアルタイ学の発展に貢献した。

2　本史料については、佐々木（2008）に詳細な紹介がある。

III．現地フィールドでの史料調査とその後

筆者は上に挙げた史料のうち、留学の機会を得られるまでは、もっぱら年代記と旅行記の記述を対照させて研究を進めた。現在のようにインターネット上でデータをやり取りできるわけではなかったため、当時の指導教員の先生や研究室の先輩方をはじめ、多くの方々に、彼らの知人である国内外の研究者とをつないでいただきながら研究を進めた。しかし文書を見ることができないことは、つねに気がかりだった。とりわけソ連期の研究者たちが残した研究蓄積を批判的に検討し、独創的な知見を生み出すためには、どうにかして文書を読んでみたいと思った。

その機会は、中央アジア古文書研究プロジェクトに参加することで訪れた[3]。2005年に同プロジェクトの現地調査に随行させてもらい、ウズベキスタン共和国ホラズム州ヒヴァ市にある国立イチャン・カラ博物館の研究員であるカーミルジャーン・フダーイベルガノフ氏を紹介していただいた。2006年からは約２年間、松下アジアスカラシップ（現・松下幸之助国際スカラシップ）と飯塚毅育英会のご支援をいただき、ウズベキスタン共和国に留学をすることができた。留学中はそれまでの文書にアクセスできない状況から一転、ウズベキスタン共和国中央国立文書館やイチャン・カラ博物館などに眠る大量の未公刊文書に出会った。

困ったのは、留学から帰国してからだった。手元には様々な方々から支援をいただき、写真に撮るか紙複写をした大量の文書の写しがあった。しかし今度はどこから手をつけたらいいか分からないほどの点数であるとともに、文書の分析を研究のレベルに引き上げる上で不可欠な、批判すべき先行研究が少なすぎた。ブレーゲルの諸研究に代表される緻密な文書研究[4]や、当時国内で唯一の年代記の分析（小前 2001）は手堅い実証研究であるがゆえに批判が難しかった。またソ連期の研究は、結論ありきで文書を配列していく、発展段階論に沿った研究が多く、それゆえそうした研究の結論を批判することは可能でも、批判しただけで、独創性を生み出すことはできなかった（批判することに目新しさがなかった）。一方で当時中央アジア史を扱いながらイギリス、ロシアの帝国論の若手のホープとして登場したモリソン（Alexander Morrison）や他の若手研究者たちの研究[5]と組み合うためには、先行研究の把握が不十分すぎた。当時ロシア帝国のトルキスタン統治についてはほとんど勉強していなかったからである。それゆえ、せっかく意気込んで帰国したものの、すぐに研究に行き詰ってしまった。

しかし転機は来た。それは2009年初モリソンが北海道大学スラブ研究センター（現・北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）の招きで来日し、都内で研究報告をしたときである[6]。筆者は彼の諸論文をあわてて読んで、そのワークショップに参加した。内容はロシア人軍政官ルィコシンの経歴とその思想の特徴に関するものであった。ルィコシン（Nil Sergeevich Lykoshin、生

3　Urunbaev（2001）、堀川（2006；2014）は同プロジェクトの成果の一部である。

4　最も包括的な研究は、ホラズムのトルクメンに関する研究である（Bregel’ 1961）。

5　英領インドとロシア領トルキスタンの植民地統治比較研究として Morrison（2008）を上梓した。

6　新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」（田畑伸一郎代表）が2009年６月２日東京大学駒場キャンパスで開催したワークショップ（Workshop on Comparative Colonial History：Focus on India and Central Asia）における報告 “Kazakhs Behaving Badly?：N. S. Lykoshin and the Aftermath of the Andijan Uprising” である。

没1860-1922年）は、ロシア帝国のプスコフ県で貴族の家系に生まれ、首都サンクト・ペテルブルグの陸軍学校を卒業後、1889年から1917年まで、ロシア領トルキスタンの軍政官として各地を転任した。1914年からサマルカンド州知事を務めたが、第一次世界大戦時の後方徴用令への抵抗として発生した1916年反乱に際して、現地民に対する過酷な鎮圧を命じた当時のトルキスタン総督クロパトキンと対立し、1917年１月に解任された。ルィコシンはトルキスタンにおけるロシア人軍政官として、ロシア文明の優越とロシア人による統治の正当性を確信すると同時に、トルキスタンきっての現地通としても知られた。またタジク語、サルト語など現地語に通暁しており、現地民行政、日常生活、慣習、裁判、遊牧民の生活様式などに関する多くの著作を残した。一方行政面では、トルキスタンへの文民統治導入に反対し、軍政の維持を主張し、ロシア支配の恩恵を理解し市民性を身につけた現地ムスリム知識人と、ロシア人軍政官との接近こそが、軍政による植民地統治の最終目標であると考えていた（塩谷 2014：232）。ルィコシンは、サマルカンド知事に転任する前の２年弱（1912-1914年）の間、アムダリヤ分区長官を務めた。アムダリヤ分区はトルキスタン総督の管轄下にあり、アム川右岸の管轄地域の統治のみならず、ロシア帝国の保護国となっていたヒヴァ・ハン国と帝国との関係を監督する任務を帯びていた。彼の報告書はヒヴァ・ハン国史の史料としてもソ連期から注目されていた。筆者もちょうどそのとき、それらを読み始めていた。しかしモリソンの報告の中で、アムダリヤ分区長官時代のルィコシンについての話は出てこなかった。そこで質問のときに、２年弱彼が分区長官をして、大量の報告書を残していることを指摘すると、モリソンはそのことに関心を持ってくれ、それ以降、彼自身の研究を紹介してくれるとともに、筆者の研究についても教示をしてくれるようになった。

Ⅳ．イチャン・カラ博物館蔵3894文書から見える新たな地平

さて、そうした研究会での偶然の出会いがあったので、筆者はルィコシンの報告書をさらに読み進めることにした。ある日、そうした報告書の一つの文面の末尾に、私（ルィコシン）が大いに関心を抱いているアンドロニコフ公らのヒヴァ・ハン国領内での土地取得の案件については、添付の文書をご参照くださいという追記があった。そのとき、アンドロニコフ（Mikhail Mikhailovich Andronikov、生没1875-1919年）という人名をどこかで見た気がしたが、思い出せなかった。しかも肝心の「添付の文書」はそこにはなかった。そこで、上述のフダーイベルガノフ氏からいただいた文書の写真を次々に見ていった。そうすると、ヒヴァ・ハンの勅令の写し（イチャン・カラ博物館蔵3894文書）にその人物の名が現れていた。現れていたというよりは、その勅令の宛人その人であった。氏には何か面白そうなことが分かってきそうだと、すぐに知らせた。

現存するヒヴァ・ハンの勅令（ヤルリグ）は、三種類ある。諸職への任命に関する勅令、特権賦与の勅令、そして国有地の私有地への移転に関する勅令である。国有地の私有地への移転に関する勅令は、ウズベキスタン共和国、ロシア連邦などで85点以上が確認されている。イチャン・

カラ博物館蔵3894文書は、ヒジュラ暦1332年サファル月16日／ユリウス暦1913年12月30日付で、当時のヒヴァ・ハン国の君主イスファンディヤール・ハンからロシア人アンドロニコフ、プチーロフ両名に宛てられた国有地を私有地に移転する勅令であった。ただしこの文書は他の同種の勅令とは異なり、①勅令の写しである、②勅令の文言に続いて、売買文書（vathīqa）、契約書（‘ahd-nāma / dogovor）が付され、全部で12葉に及ぶ大部なものである、③チャガタイ・トルコ語の本文にロシア語訳が付された合璧文書である、④カーディー（イスラーム法官）の印がないかわりに、11葉目表面にアムダリヤ分区長官ルィコシンがこの土地売買契約を認証した旨を自筆で記している、という特徴があった。

この文書が筆者を、ヒヴァ・ハン国の歴史研究から、中央アジアの水利灌漑の歴史研究、地域研究に展開する方向へと導いてくれることになった。この文書をめぐって起きた事件については、すでにソ連期の研究でエピソード的な事件として触れられていた。アンドロニコフとプチーロフが、ロシア帝国高官とのつながりを利用して、ヒヴァ・ハン国政権に圧力をかけ、同国領内に投機目的で広大な土地を取得した、いわばロシア帝国史における帝国主義段階を象徴する特権階級による投機的土地取引という評価が確立していた。そこで筆者は文書を虚心坦懐に捉えなおすことにした。イスファンディヤール・ハンはなぜこの文書をアンドロニコフ、プチーロフ両名に与え、アンドロニコフ、プチーロフ両名はなぜこの文書を受領しようとしたのか。文書作成の過程を再構成するとともに、それらの「なぜ」を考え続けた。そして、以下のことが分かってきた。①本文書に示された国有地の私有地への移転に関し、アンドロニコフ、プチーロフに有利な取引ではないばかりか、むしろハン国政権に有利な取引内容であった。②ハン国政権は土地所有権をロシア帝国の貴族身分を持つアンドロニコフに譲渡することで、当時ハン国領内で政権への抵抗運動を組織していたトルクメン遊牧集団との係争地となっていた当該土地をアンドロニコフらの所有権下に置こうとした。それによって、もしトルクメンが抵抗を続ければ、それはハン国政権への抵抗ではなく、その宗主国たるロシア帝国の貴族に対する反乱ということになる。いわば自領内で対処できない抵抗運動を、アンドロニコフとその背後にいたロシア帝国政府(陸軍省)に丸投げしようとした。③アンドロニコフらには、不利な取引であれ、ハン国領内に土地所有権を獲得することで得られる企業としての利益、企業活動の先駆性を認識していた。その背景には以下のような事情があった。1900年代末ごろから、ロシア領トルキスタンでは綿花プランテーション設立ブームが起きていた。しかし当時、ロシア領トルキスタンにおいて株式会社経営による大規模灌漑事業、プランテーション設立のための土地所有権の取得には法的制限があった。株式取得者にユダヤ人や外国人が含まれる会社の土地取得が著しく制限されていたのである。そこで帝国最大の銀行の頭取であったプチーロフは、貴族身分をもち帝国中枢にも顔が利くアンドロニコフのつてを頼って、保護国であったため帝国法の適用が曖昧であったヒヴァ・ハン国領内で大規模な土地所有権をハン国政権に認めさせ、それをさらにロシア植民地当局に追認させるという方法により、中央アジアにおいて先駆的な株式会社経営による綿花プランテーション設立を目指していた。それゆえに、自分たちに不利な取引であっても、ヒヴァ・ハン国政権から土地所有権（チャガタイ・トルコ語で milk）を取得し、その翻訳としてロシア語の土地所有権

（sobstvennost'）に相当する語を勅令に明記させ、さらにロシア植民地当局の軍政官（ここではルィコシン）に認めさせるという方法をとり、一応の成功を収めたのである。それは不利な契約内容を補って余りある権利の獲得であった。イチャン・カラ博物館蔵3894文書11葉目表面のルィコシンの署名は、おそらくは彼が渋々この土地所有権の取得を認めたことを示していた。なぜ渋々なのか。上述したようにルィコシンは、ロシア領トルキスタン（トルキスタン）における軍政の継続と、ロシア支配に感謝する現地ムスリムと軍政を支えるロシア人軍政官との相互理解を重視した人物であった。それゆえルィコシンは、現地社会に異質な原理（ここでは株式会社経営による綿花プランテーションという新たな企業原理）を持ちこもうとするアンドロニコフ、プチーロフの動きを注視し、トルキスタン総督や陸軍省に彼らの計画に介入するよう働きかけを続けた。だが1914年１月の時点で彼らの動きを止めることはできず、上述の署名をすることになった。なおロシア植民地当局は、ルィコシンのサマルカンド知事への転任後、プチーロフらにヒヴァ＝ロシア間の条約で規定されたロシア人の権利保護を与えず、保護要請には黙殺で応えた。さらに帝国中央政府は、ホラズム・オアシスのほぼ唯一の水資源であったアム川の流水の管理権を帝国直轄とする法整備を進めて、ヒヴァ・ハン国政権に圧力をかけた。こうしてこの綿花プランテーション設立計画は頓挫してしまった（塩谷 2014：177-236）。

さらに、このプランテーション計画が持ち上がった地域（ヒヴァ・ハン国中部から西部にかけてのラウザーン運河周辺）は、ハン国の興亡と密接に結びついた興味深い地域であったことも分かってきた。16世紀までホラズムの中心都市であったウルゲンチが位置し、その後17-18世紀には乾燥化が進んだが、19世紀初頭からふたたびアム川の水資源が利用できるようになり、1830-1840年代にはハン国政権が盛んに灌漑事業を主導し、ホラズム地方外部から遊牧、定住様々な集団を新たな灌漑地に移住させた。しかし移住してきたトルクメン遊牧集団の一部の反乱をきっかけに、1850年代以降この一帯は荒廃してしまう。1860年代末から徐々に復興に向かったところで、1873年ロシア軍のヒヴァ遠征によりハン国は保護国化された。ロシア帝国の統治は、陸軍省とその管轄下にあったトルキスタン総督府を中心にした植民地統治であったが、帝国政府、総督府ともにラウザーン運河一帯の灌漑事業には深い関心を寄せ続けた。なぜならばこの一帯は、アム川をアラル海ではなくカスピ海へと転流させ、ロシア内地からヴォルガ川、カスピ海、アム川を経てアフガニスタン、さらにインドに至る連結水路構想の重要な起点と見なされたからである。それゆえ、ラウザーン運河一帯では、住民の動員、費用負担、さらに遊牧民集団の反乱を危惧するハン国政権の消極姿勢とは対照的に、ロシア皇族、水工技師、軍人など様々な人々が灌漑工事を企てては失敗した。その過程でトルクメン遊牧民集団の反乱が継続的なものになっていった（塩谷 2019）。現在、ラウザーン運河は消滅し、かわりにアム川からホラズム西部のトルクメニスタン領内に水を供給するハン運河が通っている。1917年のロシア革命以後、この一帯でどのような灌漑工事が続いたのか、それがホラズムを横切るウズベキスタン、トルクメニスタン両国の国境線とどのような関係にあるのか、そして何より現地の人々がハン運河の存在をどうとらえているのか、これらの問題に筆者は今も取り組み続けている。

Ⅴ．おわりに―今後の可能性―

博士論文を書き終えたのちに、ふと卒業論文の延長線上でなんとか書き上げた修士論文を読み返し、ある一節が目に留まった。そこには以下のように書かれていた。「確かにウズベクとトルクメンは、前近代においても区別される集団であり、運河の水をめぐって、とくに19世紀後半以降ウズベクとトルクメン諸部族との対立が顕在化することは頻繁にあった。しかしその対立を、１つの運河を共有する居住者間の争いとして捉えることも可能である。それを現地に生きる論理に沿う形ではなく、ウズベク民族とトルクメン民族という近代的な民族概念に基づいて解決しようとした民族的境界画定への評価は、再考すべき今後の課題である」と。筆者は、イチャン・カラ博物館蔵3894文書とその舞台となったラウザーン運河との出会いにより、博士論文がまとまっていき、ヒヴァ・ハン国の歴史研究から、中央アジアの水利灌漑の歴史研究、地域研究へと展開できる機会を得たと信じていたが、実際には卒業論文以来やってきたことの周りをぐるぐるとめぐってラウザーン運河にたどり着いたようだ。つまり、乾燥地域に位置するホラズム・オアシスに展開したヒヴァ・ハン国の歴史を研究するうえで、一つの水路ないし運河に注目することが重要だということを、ずいぶん早くに認識していた（もしくは教示を受けていた）。そして研究が一回りするたびに、新たな課題を発見することもあれば、以前途中で投げ出してしまった、または今後の課題としただけで中断してしまったことを思い出すこともある。上記の一節は、現代中央アジア諸国の領域の祖型を生み出した、1924年からソ連体制下で断行された中央アジアにおける民族共和国境界画定を、ラウザーン運河のミクロな歴史に即して考察することが必要だということを筆者に思い起こさせてくれた。ラウザーン運河周辺で、ときに対立、ときに共存を繰り返してきたウズベクとトルクメンが、両者ともに近代的民族へと編制されていく過程で、少なくともホラズム・オアシスにおける両者間関係の文脈では、その対立の局面だけが強調されるようになってしまった、その転換点が民族共和国境界画定だったのではないだろうか。

かつてヒヴァ・ハン国史の主要史料は、年代記、文書、旅行記・使節記の３種類であった。しかし2000年代以降利用できる史料の種類は大きく広がった。まず入手が難しかった未公刊の年代記が公刊され（Muḥammad Riżā Mīrāb Āgahī 2012；Muḥammad Riżā Mīrāb Āgahī 2016）、さらに未整理の写本の検討から新たな著作が発見、公刊されている（Toshov 2018）。また、ホラズムを拠点としたイスラーム聖者たちの活動や彼らが構築していたネットワークを、彼らの道統や奇跡を伝える聖者伝の整理、公刊（Babadjanov 2000）と、聖者伝の分析（DeWeese 2001；Bustanov 2016）にもとづき明らかにする作業も始まっている。ヒヴァ・ハン国の崩壊後、ソ連体制下において活躍した郷土史家たちが残した史料への注目も始まった（Abdurasulov and Toshov 2019）。ヒヴァ・ハン国の周辺地域で書かれた諸言語史料を用いた研究も進んでいる。たとえばサライの先駆的業績[7]に始まる、オスマン帝国の宮廷言語であったオスマン・トルコ語文書を利用した研究は、1980年代すでに日本でも着手されていたが、最近では19世紀末から20世紀初頭にかけて中央アジアからオスマン帝国に向かった巡礼者たちの活動と生涯を跡づけた研究が現れた（Can

7　Saray（1984）。小松（1988）による批判的検討がなされている。

2020)。これにより、国家間の交渉から民間の交流へとオスマン帝国と中央アジアの関係史研究は広がりを見せている。またガージャール朝期のイランで執筆、刊行されたペルシア語史料を利用した研究も現れている。ガージャール朝とヒヴァ・ハン国との交渉過程を記述した史料に現れる近代イランの領域概念の形成過程を描きだした Noelle-Karimi（2016）と Eden（2016）はその代表例である[8]。こうした新たな史料を用い、新たな視点を提示する研究から継続的に刺激を与えられることもまた、研究を進めるうえで不可欠である。

史資料は、形態やテーマを狭く限定してしまわなければ、無限にある。自身の関心に従い、そうした史資料がある場（フィールド）に赴き、それらを知る現地の人々と語らい、ひたすら記録にとどめる。これは民俗学や人類学のみならず、歴史学の研究者にとっても必須の作業になっているのではないだろうか。インターネットで特定の史資料群の一部が容易に把握できるようになっている状況下で、研究者の活動はそこから得られる情報だけを理解し、分析し、成果として公表するだけでは不十分だろう。インターネット上で得られた情報が、特定の史資料群のどの部分なのか、関連する史資料とどういう関係にあるのかを理解してはじめて、特定の資料・史料の理解・分析・成果公表へと進むことができる。また多くの資料・史料を収集した上で整理し、そのうえで先行研究や研究テーマが近い研究者の直近の取り組みを知れば、おのずと自分がやってみたい、もしくはやるべきと思える研究テーマは見えてくる。そのために自分自身では地道に史資料の整理と読解という作業を進め、その節目節目に研究会などで他の研究者の話を聞き、意見を交換することは大変重要である。個人にとって歴史学の研究を進めていくということは、頭だけで考えるのではなく、体全体を動かし考えていくということではないだろうか。

参考文献

ウテミシュ・ハージー著、川口琢司、長峰博之編、菅原睦校閲 2008『チンギズ・ナーマ』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

木村暁 2008「中央アジアとイラン―史料に見る地域認識―」宇山智彦編『地域認識論―他民族空間の構造と表象―』講談社、39-72頁。

小前亮 2001「コングラト朝ムハンマド・ラヒーム・ハンの政権について―*Firdaws al-Iqbāl*による考察―」『内陸アジア史研究』16、39-59頁。

小松久男 1988「書評：Mehmet Saray, *Rus İşgali Devrinde Osmanlı Devleti ile Türkistan Hanlıkları Arasındaki Siyasi Münasebetler (1775–1875)*, İstanbul, 1984」『バルカン・小アジア研究』14、107-113頁。

佐々木紳 2008「メフメト・エミーン・エフェンディの『中央アジア紀行』について―概要と史料的価値―」『内陸アジア史研究』23、153-163頁。

塩谷哲史 2014『中央アジア灌漑史序説―ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡―』風響社。

――― 2019『転流―アム川をめぐる中央アジアとロシアの五〇〇年史―』風響社。

堀川徹編 2006『中央アジアにおけるムスリム・コミュニティーの成立と変容に関する歴史学的研究』平

8　イラン概念の歴史的変遷については、木村（2008）を参照。

成14年度－平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（1））研究成果報告書、京都外国語大学。
堀川徹、大江泰一郎、磯貝健一編 2014『シャリーアとロシア帝国—近代中央ユーラシアの法と社会—』臨川書店。
Abbott, J. 1884 *Narrative of a Journey from Heraut to Khiva, Moscow, St. Petersburgh, during the Late Russian Invasion of Khiva with Some Account of the Court of Khiva and the Kingdom of Khaurism*, 2 Vols., 3rd Edition, London: W. H. Allen & Co..
Abdurasulov, U. and N. Toshov 2019 "Soviet 'Local' Knowledge: Babajan Safarov's Notes on Slavery in Khwarazm," in N. Purnaqcheband and F. Saalfeld (eds.), *Aus den Tiefenschichten der Texte: Beiträge zur turko-iranischen Welt von der Islamisierung bis zur Gegenwart,* Wiesbaden: Reichert Verlag, pp. 265-292.
[ʿAbū al-Ghāzī Bahādur Khān] 1958 *Rodoslovnaia turkmen: Sochinenie Abu-l Gazi khana khivinskogo*, A. N. Kononov (ed.), Moscow, Leningrad: Izdatel'stvo Akademii nauk SSSR, 1958.
[———] 1970 *Shajara-yi Türk, Histoire des Mongols et des Tatares*, publiée, traduite et annotée par P. I. Desmaisons, St. Leonards: Ad Orientem.
Babadjanov, B. (ed.) 2000 "Khalvat-i Ṣūfīhā," in A. von Küegelgen, A. Muminov and M. Kemper (eds.), *Muslim Culture in Russia and Central Asia. Vol. 3: Arabic, Persian and Turkic Manuscripts (15th-19th Centuries)*, Berlin: Klaus Schwarz Verlag, pp. 114-217.
Bregel, Y. 1978 "The *Tawārīkh-i Khōrazmshāhīya* by Thanā'ī: The Historiography of Khiva and the Uzbek Literary Language," in L. V. Clark and P. A. Draghi (eds.), *Aspects of Altaic Civilization II: Proceedings of the XVIII PIAC, Bloomington*, *June 29-July 5, 1975*, Bloomington: Asian Studies Research Institute, Indiana University, pp. 17-32.
Bregel', Iu. E. 1961 *Khorezmskie turkmeny v XIX veka*, Moscow: Izdatel'stvo Vostochnoi literatury.
——— 1966 "Arkhiv khivinskikh khanov (predvaritel'nyi obzor novykh dokumentov)," *Narody Azii i Afriki*, 1966-1, pp. 67-76.
Bustanov, A. K. 2016 "The Bulghar Region as a "Land of Ignorance": Anti-Colonial Discourse in Khvārazmian Connectivity," *Journal of Persianate Studies,* 9-2, pp. 183-204.
Can, L. 2020 *Spiritual Subjects: Central Asian Pilgrims and the Ottoman Hajj at the End of empire*, Stanford, California: Stanford University Press.
Danilevskii, G. I. 1851 "Opisanie Khivinskogo khanstva," *Zapiski Imperatorskogo Russkogo geograficheskogo obshchestva,* V, pp. 62-139.
DeWeese, D. 2001 "The Sayyid Atā'ī Presence in Khwārazm during the 16th and early 17th Centuries," in D. DeWeese (ed.), *Studies on Central Asian History in Honor of Yuri Bregel*, Bloomington, Indiana: Indiana University, Research Institute for Inner Asian Studies, pp. 245-281.
Eden, J. 2016 "A Persian Captive's Guide to Khiva: Esmāʿīl Mir-Panja's Satirical Recollections," *Journal of Persianate Studies,* 9, pp. 205-227.
Mehmed Emin Efendi 1290/1879 *İstanbul'dan Asyâ-i Vusṭâya Seyâḥet,* Kırk Anvar Matba'ası.
Morrison, A. S. 2008 *Russian Rule in Samarkand: 1868-1910: A Comparison with British India*, Oxford: Oxford University Press.
——— 2012 "Sufism, Panislamism and Information Panic: Nil Sergeevich Lykoshin and the Aftermath of the Andijan Uprising," *Past and Present*, 214-1, pp. 255-304.

Muḥammad Riżā Mīrāb Āgahī n.d. *Gulshan-i dawlat*, Institut vostochnykh rukopisei Rossiiskoi Akademii nauk, Tiurkskie rukopisi, No B1891.

——— 2012 *Jāmi'-i vāqi'āt-i Sulṭānī*, N. Tashev (ed.), Samarkand, Tashkent: International Institute for Central Asian Studies, 2012.

——— n.d. *Riyāż al-dawla,* İstanbul Üniversitesi, Türkçe Yazmalar, N. 82, ff. 524b-758a.

——— n.d. *Shāhid-i iqbāl,* Institut vostochnykh rukopisei Rossiiskoi Akademii nauk, Tiurkskie rukopisi, No. 572.

——— 2016 *Zubdat al-tavārīkh,* Kh. Nazirova (ed.), Samarkand, Tashkent: International Institute for Central Asian Studies.

Muḥammad Yūsuf Bīk Bayānī n.d. *Shajara-yi Khvārazmshāhī*, Institut vostokovedeniia Akademii nauk Respublika Uzbekistan, MS. No. 9596.

Murav'ev, N. 1822 *Puteshestvie v Turkmeniiu i Khivu v 1819 i 1820 godakh, gvardeiskogo general'nogo shtaba Kapitana Nikolaia Murav'eva, poslannogo v sii strany dlia peregovorov*, 2 Vols., Moscow: Tipografiia Avgusta Semena.

Noelle-Karimi, C. 2016 "On the Edge: Eastern Khurasan in the Perception of Qajar Officials." *Eurasian Studies*, 14, pp. 135-177.

[Riżā Qulī Khān Hidāyat] 1876 *Relation de l'ambassade au Kharezm (Khiva) de Riza Quoly Khan*, publiée, traduite et annotée par Charles Schefer, Paris: E. Leroux.

Saray, M. 1984 *Rus işgali devrinde Osmanlı devleti ile Türkistan hanlıkları arasındaki siyasi münasebetler (1775-1875)*, İstanbul: İstanbul Matbaası.

Shīr Muḥammad Mīrāb Mūnis and Muḥammad Riżā Mīrāb Āgahī 1988 *Firdaws al-iqbāl: History of Khorezm*, Y. Bregel (ed.), Leiden: Brill.

Toshov, N. (ed.) 2018 *Īsh Murād b. Ādīna Muḥammad ʿAlavī: Jamshīdī ṭavāyifī fatḥī (The Subjugation of the Jamshīdīs)*, Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften Verlag.

Urunbaev et al. (eds.) 2001 *Katalog khivinskikh kaziiskikh dokumentov XIX - nachala XX vv.*, Kyoto: Mezhdunarodnyi institut po izucheniiu iazykov i mira Kiotskogo universiteta po izucheniiu zarubezhnykh stran.

Vámbéry, A. 1864 *Travels in Central Asia: Being the Account of a Journey from Teheran across the Turkoman Desert on the Eastern Shore of the Caspian to Khiva, Bokhara, and Samarcand performed in the Year 1863*, London: John Murray.